

学都屋台食談

第6回

金沢で過ごす学生生活の意義や仕事観・人生観を、石川県に拠点を構える企業経営者や大学学長らが講師となり、講師の経験をもとに学生と語る「学都屋台食談」が11月10日から12月2日にかけて、金沢市の片町中央味食街で開催されました。2006年から今年で12年目を迎え、講師と県内の大学に通う学生が和やかに繰り広げた食談で、講師が学生に熱く語られたメッセージを紹介します。第6回は神田享勉・金沢医科大学学長。

人類は学びを通して多様性を獲得した

今日は全員が4年生以上と、皆さん教育機関での修学を終える時期が迫っていますね。「もう、勉強は終わり」と、ホッとしているところでしょうか。しかし、学生でなくなったとしても、学びが終わることはありません。

人間にとって、学ぶ意義とは何か。よく聞く回答が、「それを一生かけて学んでいく」というものです。この答えは確かに真理でしょうが、私は学びの本質は他にもあると考えています。それは、新しい知識を得て、多様性という武器を手にかざることです。

人間は、自分の知識の延長でしか行動することができません。知らないことはできないのです。もし、知識が画一的なら、行動も画一化し、環境の変化にぜい弱になってしまいきます。

これは遺伝子も同様です。遺伝子に多様性がなければ、致死性のインフルエンザが一度流行するだけで、人類は滅びます。現在、人類が多様な遺伝子を保持しているのは、多様性を作り出すことで生き残ってきた証なわけです。

学問も同じで、役立つから学ぶ価値があるのではなく、多様であること自体に意味があり、互いに尊重し、刺激し合うことが重要なのです。

謙虚な姿勢が失敗を成長の糧にする

新しい知識が生む新しい視点は、解剖学者の養老孟司氏が提唱した「バカの壁」を乗り越える足掛かりにもなります。「バカの壁」は、要約すると、自分で壁を作り、その先は知らなくていいという人間の心の性質です。この壁は、ときに挫折を引き止まりにしていまいます。

40代のころ、私には、それまでの診察スタイルを大きく変える挫折がありました。病状を正確に伝えることを重視していたのですが、ある患者さんが来なくなり、再び来院したとき、甚だしく悪化していたのです。理由を尋ね、「先生に叱られて、病院に行け

なくなった」と聞かされたときは、気持ちが沈み、しばらく思い悩みました。しかし、これを契機に、コミュニケーションを重視し、次も来てもらうため、笑顔で帰ってもらおうようにしたのでした。

ベテランになって仕事のやり方を変えられたのは、壁を作らず、「挫折にも学ぶものがある」と、学びに対する謙虚さが少なからずあったからだと思います。挫折を回避するため工夫することも大事ですが、挫折から学ぶことも同様に大切なのです。

誰かを幸せにするより巡り巡って自分を幸せに

ところで、コミュニケーション重視の診察に切り替えたことで、私自身にもよい変化がありました。それは、ビジネスライクに割り切っていた仕事に対し、生きがいを感じるようになったことです。

これには生物学的な根拠もあります。人間は、相手が幸せになるのを見ると、脳内で「幸せホルモン」と呼ばれるオキシトシンの分泌が活性化し、自分も幸せを感じます。この脳の仕組みは、多くの哺乳類が遺伝子レベルで備えていて、本能みたいなものです。

オキシトシンが多いと寿命が伸びることも分かっていますから、私は仕事でどんどんオキシトシンを分泌させて、少なくとも100歳までは現場に立ち続けたいと思っています。



参加生

前列左から、西島明日香さん(北陸大学5年)、山田陽樹さん(金沢工業大学4年)、後列左から、甲斐優さん(金沢大学大学院1年)、竹端智之さん(金沢医科大学4年)、増井拓良さん(金沢大学大学院2年)

企画/榊都市環境マネジメント研究所

他人と自分を幸せにする生き方を



講師

金沢医科大学
学長

神田 享勉氏

かんだ・つぎやす

1953年、群馬県前橋市出身。金沢医科大学医学部卒業。アメリカ合衆国ノースカロライナ州立大学留学。群馬大学医学部助教授などを経て、2001年に金沢医科大学総合診療科特任教授、2008年に地域医療学部門教授に就任。学長補佐、氷見市民病院副院長などを歴任し、2016年9月より現職。



金沢医科大学
医学部・看護学部